感極まった声をもらす翠の顔に、苦痛はうかがえない。むしろ二度目の挿入で早くも悦びを感じているほどだ。

（すごいです……この格好だと、ずっと深くショウが感じられます！　でも怖いです……こ、こんなに奥まで挿れられたら……私、きっと変になっちゃいます……！）

挿入当初はやや締めつけが強すぎてスムーズさを欠いていたが、膣粘膜から溢れでる愛液のおかげで、かなり正司の腰の動きが滑らかになってきた。当然ピストンのスピードも増し、亀頭のエラ部分でごりごりと襞肉を抉られる快感も曲線を描くように加速していく。

「あっ、あふっ、ん、あぁン！　あっ、すごいですの、ショウが、ショウのが奥にっ！」

初体験のときにあれほど痛かったのがまるで嘘のように、肉棒が出入りするたびに痺れるような悦楽が全身を駆け抜ける。

「イイですの、これ、気持ちイイですのぉ！」

毛穴が開くようなぞくぞくする快感に、令嬢にあるまじきはしたない嬌声がもれてしまう。

バックから激しく腰を使う正司も、ただ欲望に任せているのではなく、しっかりと翠の反応をうかがいつつ、いろいろと角度やリズムを変えているのも効果的だった。

一度遥に射精している分、余裕があるのだろうが、ちゃんと翠を気遣ってくれているのが触れ合う肌を通じてはっきりと伝わってくる。

（嬉しいですっ、ショウが私のこと、気持ちよくしてくれてます……！）

身体だけでなく心も繋がったという確信が、より高い次元の快感へと導いてくれる。

「イイですのっ、感じますのぉ！　もっと、アア、もっと激しくぅ！」

だが翠は、だらしなく口もとを緩め、欲望に蕩けた表情を浮かべてしまったことをすぐに後悔することになる。

「ずいぶんとイヤらしい顔をするのね、翠は」

「ヒッ!?　お、お姉様……!?」

すっかりその存在を失念していた姉が、くすくすと笑いながら妹の蕩けきった顔を見あげていた。ケダモノのようにバックから貫かれ、自ら腰を振り、貪欲に快楽を求める浅ましい姿のすべてを、よりによって一番見られたくない相手に見られていたのだ。

「人のことを散々イヤらしいなんて言っておきながらなによ、そのみっともない顔は。マサに後ろから挿れられるの、そんなに気持ちイイの？　涎を垂らしながらアンアン喘ぐなんてはしたないと思わないのかしらね？」

妹に主導権を握られたまま初体験をしてしまった腹いせだろう、遥の口調はかなりねちっこい。しかも言葉による責めだけでなく、直接的な仕返しもしてくる。

「人のこと散々言ってたクセに、翠だってこんなになってるじゃないの」

「ひぃン！　ダメ、ダメですお姉様っ！　そこは……乳首は苛めないでくださいっ！」

ちょうど遥の顔の真上にある突起が、指先でつままれてしまった。やや小振りな乳房のわりに、翠の乳首は少し大きい。その敏感な性感帯を左右同時に指で転がされ、引っ張られては、翠は涙をこぼしながら啼くしかなかった。

「アアーッ！　アッ、アアッ！　らめっ、乳首っ、乳首はらめぇ！」

汗と涙と涎をぽたぽたと垂れ流す妹を見あげる遥は、してやったりの顔だ。先ほど散々乳房を絞られ苛められたことへの仕返しなのだろう。

「あら、翠は乳首が感じるのね。どんどんコリコリになってるわよ？」

「ひっ、やめっ……あっ、ダメ、後ろから犯されてるのにっ……乳首までいじられたら私、私ぃ……アアッ、イクっ……イッちゃいますのぉ！」

処女を失って間もない少女が、生まれて初めてのエクスタシーに向かって昇りはじめる。狭すぎる膣口周辺の肉唇はペニスが前後するたびに痛々しいほどに捲れ、契合部から溢れた真っ白な本気汁は内股を伝ってシーツにまで達していた。

子宮口を奥に押しこまんばかりに激しく突いてくる勃起は射精が近いのだろう、いちだんとその体積を膨らませている。

「お嬢様、もう僕も限界です……！」

「わた、くしも……もう……あっ、はあぁ……っ」

正司と翠の声が掠れ、いよいよ最後の瞬間が迫ってくる。

（すごいです……こんなの初めてですわ……ああ、なにかこみあげてきます……お腹の奥から、熱いのが……アアっ、イク……これがイクってことなのですね……！）

妹の絶頂が近いのを察知した遥が、ダメ押しをしてくる。

「イキなさい、翠。あなたの恥ずかしいアクメ顔、全部見ていてあげるから」

「あ……はあぁン！　ダメぇ！　乳首……乳首ぃッ!!」

実姉に勃起乳首を口に含まれ、前歯で嚙まれるとほぼ同時に、膣奥に灼熱のスペルマが注ぎこまれた。

「アアァッ！　出てますッ、熱いのが奥に出てますぅ！　イヤ、こんなのダメ……イヤ、イキますっ……アア、見ないで……お姉様、私のこんなはしたない顔、見ないでえぇ!!　ヒッ……はくうううぅっ!!」

白目を剝き、だらしなく開きっぱなしになった口からどろりと涎を垂らすという弛

緩しきった表情を姉に視姦されながら、翠は魂がどこかに消し飛ぶかと恐怖するほどのすさまじい快楽に呑みこまれた。

（イヤです……こんなの……ああ、クセになっちゃう……私、もうショウがいないと生きていけない身体にされてしまいました……）

愛しい男の子種を子宮に感じながら、翠は遥の裸体に折り重なるようにして崩れ落ちた。

「翠お嬢様、大丈夫ですかっ？」

「平気よ。気持ちよすぎただけ」

遠くに正司と姉の声を聞きつつ、翠は重くてたまらない瞼を閉じた。